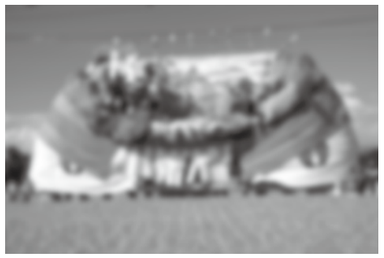

未来に残したいふるさとの自然環境
その大切さ、美しさを感じることが、
その姿を守り、次代につなぐ第一歩かもしれない。
今を感じ、そして伝えよう次代に―。

育み、分かち合いながら生かす時代（とき）―。

エピローグ

途切れることなく続いてきた時間、約400年―。絶え間なく流れ、安曇野の大地を潤し、人々の生活を支えてきた拾ケ堰。ときに人々は生死を掛け水を争い、水害に見舞われながらも水を敬い暮らしてきました。

農民の知恵とたゆまぬ努力により数々の堰が開削されたことで、各集落に水が導かれ、安曇野の荒野は肥よくな大地へと変ぼうしました。この全国に誇れる先人の偉業は、単に田へ水を引くのみならず、水は地表から地下に深く浸み込み、磨かれ、結果として地下水の涵（かん）養につながり、飲み水のほかワサビ栽培、ニジマスの養殖など先人が予想しえなかった多大な恵みを私たちに、もたらしたのです。

今回の取材を通して、日々水と向き合いながらひたむきに暮らす水先人ともいうべき人々からは、さまざまな提言や声を伺うことができました。ニジマス養殖の水先人からは、地下水を共有財産として松本平全体での広域的な取り組みを望む声、またワサビ栽培の水先人からは実効性のある取水ルールを求める声、井戸を生活水とする水先人からは、取水ルールを生かし防災時に井戸を活用すべきとの提言、米作りの水先人からは、安曇野の田園風景を守りながら

Epilogue

地下水を守る決意の声等々…。

穂高南小学校4年1組の子どもたちは、「一人ひとりにできることは小さいと思います。でも、それをみんなで心掛ければ地下水を守ることができるかもしれない。皆さんも一緒に地下水について考えてみませんか」と呼び掛けています。私たちは、このメッセージに応えていかなければなりません。

地下水を守り、育（はぐく）み、生かすための安曇野ルール。今、地下水の取水ルールを定める条例案が策定され、新たなルール作りが始まろうとしています。転作田など農地を利用した地下水涵養などの新たな取り組みや、地下水利用者が地下水涵養事業の費用を一定のルールのもと負担し賄う仕組みづくりを実現するには多くの課題があります。しかしながら、先人たちが、知恵を出し合いながら協力して堰の開削という大偉業を成し遂げたように、地下水保全のための新たな仕組みづくりも、みんなで知恵を出し合い、地域ぐるみで取り組むことで成し遂げられるかもしれません。

安曇野市が誕生し、これまで各町村の境だった河川などを私たちは共有し、まちづくりに生かしてきました。今、地下水をかけがえのない共有財産として、守り、育み、分かち合いながら、産業や地域づくりに生かしていく新たな時代が訪れています。

写真：拾ケ堰から常念岳を望む